

仙龍と私 ~追悼 仙龍のおばちゃん~

●春日部地区浦高会より

幹事 伊藤貴成 (高47回)

高校生は腹が減る。当時柔道部で青春を謳歌していた私は、今とは違いそこそこマッチョで、とてつもなく燃費が悪い身体をしていたため、1日5食は食べていた。2時間目の休み時間にはパン2つを吸収、3時間目の休み時間には家から持ってきた2段重ねの巨大弁当が音もなく消え、それでも飽き足らずに昼休みはどこかに食べに行っていた。部活終わりには部活の友人と何かしら買い食い、そして家では何事もなかったかの如く夕飯を平らげ、それでも体重は減っていった。その頃、当時母親が体調を崩し、家から弁当を持って行けなくなり、エンゲル係数は急上昇。すぐに私の財布は悲鳴を上げた。こんな状態の私の無尽蔵の食欲を、財布に優しく毎日満たしてくれていたのが、他ならぬ仙龍だった。

仙龍を知る皆さんにとっては常識ではあるが、何を頼んでも大盛りと見紛うばかりの「普通盛り」。「カツ丼+ワンタン」・「ラーメン+チャーハン」等のセットメニューは両方とも一人前と思しき量。当時の私のわんぱくな胃袋を満足させてくれていた。同級生には「丸福派」も多くいたように思うが、私は断然「仙龍派」だった。来る日も来る日も通い続け、...そしていつの頃からか、日替わりメニューを毎日頼むようになった。するとある日を境に、オーダーもしていないのに、席に座ったら日替わりメニューが目の前に。「これって、もう家と変わらないよな、...」と思いながらも、何の疑問もなくたらふく食べさせてもらっていた。あの当時、私の身体の多くは仙龍によってできていたのだった。それからというもの、自分の親の如く、仙龍のおばちゃんには我儘ばかり言ってきた。学園祭で蕎麦屋を開いた時に、鍋が足りなくなって急遽鍋を借りに行ったり、昼休憩だった15時位に裏手の母屋に顔を出して「おばちゃん、何か食べさせて」と声をかけ、カツ丼を無理やり作ってもらったり、...。本当にいっぱい甘えさせてもらった。

OBになってからも付き合いは続く。部活のOB会の夏・冬の会合は仙龍が定番だった。私よりも更に我儘な先輩が、酒やら食材やらを持ち込んでみたり、酔っ払って大騒ぎしてみたり、普通だったら出入り禁止になってもおかしくない不埒な悪行三昧だったが、おばちゃんは「いいんだ、いいんだ。皆いつつも来てくれるんだから。」といつも笑って許してくれた。

子供が産まれてからは、カミさんや子供も仙龍によく連れて行った。高校の時と変わらぬボリュームのため子供は当然食べ切れず、私とカミさんはいつも子供の余りを食べていた。成長につれ子供たちも食べられるようになってきたら、おばちゃんは「大きくなったねえ。足りないんじゃないの？何か持ってこようか？」と、頼んでもいない小鉢やデザートを出してくれることも。新年に家族で仙龍に行くと、子供たちにお年玉までいただいてしまう始末で、ますます「実家感」が半端なかった。私の高校卒業時におばちゃんに贈ったエプロンだけではとても足りないくらい、現在に至るまでお世話になりっぱなしだった。

つい先日も15時位にダメ元で突撃すると、当然ホールの方に「今準備中で、...」と言われてしまった。すると奥からおばちゃんが顔を出してくれ、「あら、伊藤ちゃんじゃない？よく来たね。伊藤ちゃんは私のお客さんなんだから、何時だっていいんだ。何食べる？」と優しく迎えてくれた。またおばちゃんに無理言っちゃったな、と反省しながらも、おばちゃんの言葉が内心凄く嬉しかった。

そんな数多の思い出が詰まった仙龍がまさか無くなってしまおうとは、そしてあの仙龍のおばちゃんが突然居なくなってしまうとは、...。一報が入ってから、その日は久々に仕事が手につかず、半ば腑抜けた状態で仙龍に向かった。ネットに投稿されている写真や動画で状況は理解していたつもりだったが、現場を見てもなお信じられなかった、いや、信じたくなかった。2月の地域職域同窓会の会合の際に挨拶しに行った時におばちゃんと交わした「またご飯食べに来るね」と言ういつもと変わらぬ約束が、こんな形で実現できなくなるとは思ってもみなかった。また、こんなことになってしまってから今更気付かされたのだが、20年以上の付き合いにもかかわらず、私は仙龍のおばちゃんの連絡先を知らなかった。それもそのはず、仙龍に電話さえすれば、いつも変わらずおばちゃんが電話に出てくれていた。当たり前存在しているものが突如消えてしまったことの喪失感に気付かされ、余計に悲しくなった。泣けもしなかった。

あの日を境に、日頃はあまり連絡を取ることのなかった多くの同窓生と連絡を取り合った。皆、一様にショックを受け、言葉を失っていた。私如き若輩が言うのもなんだが、私同様の多くの同窓生が、あの日、「実家」と「母」を失ったのだ。

世界各国に散らばるおばちゃん「息子」たちの一人として、多くの同窓生の共通の憩いの場である仙龍、そして、「浦高生の母」として永く我らの胃袋を一手に引き受けてくれていた仙龍のおばちゃんに感謝。また、仙龍の復活を心より願う。そして改めて、謹んで仙龍のおばちゃんのご冥福をお祈りする。合掌。

◇ ◇ 仙龍のおばちゃんとのお付き合いが一番深い伊藤貴成さんに春日部地区浦高会を代表して追悼文をお願いしました。春日部地区浦高会広報担当 香田 寛美 拝